

笹沢左保

長編サスペンス推理

霧の鬼畜

NON NOVEL





NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一カ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—258

長編サスペンス推理 霧の鬼畜

定価 690 円

昭和 63 年 2 月 25 日 初版第 1 刷発行

著 者 ささ ざわ さ ほ
笹 沢 左 保

発 行 者 伊 賀 弘 三 良

発 行 所 しょう でん しゃ
祥 伝 社

〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル

☎ 03 (265) 2081 (営業)

☎ 03 (265) 2080 (編集)

印 刷 図 書 印 刷

製 本 ナ シ ョ ナ ル 製 本

長編サスペンス推理

世沢左保 務の鬼畜

目次

第一章

結婚式

5

第二章

卒業式

67

第三章

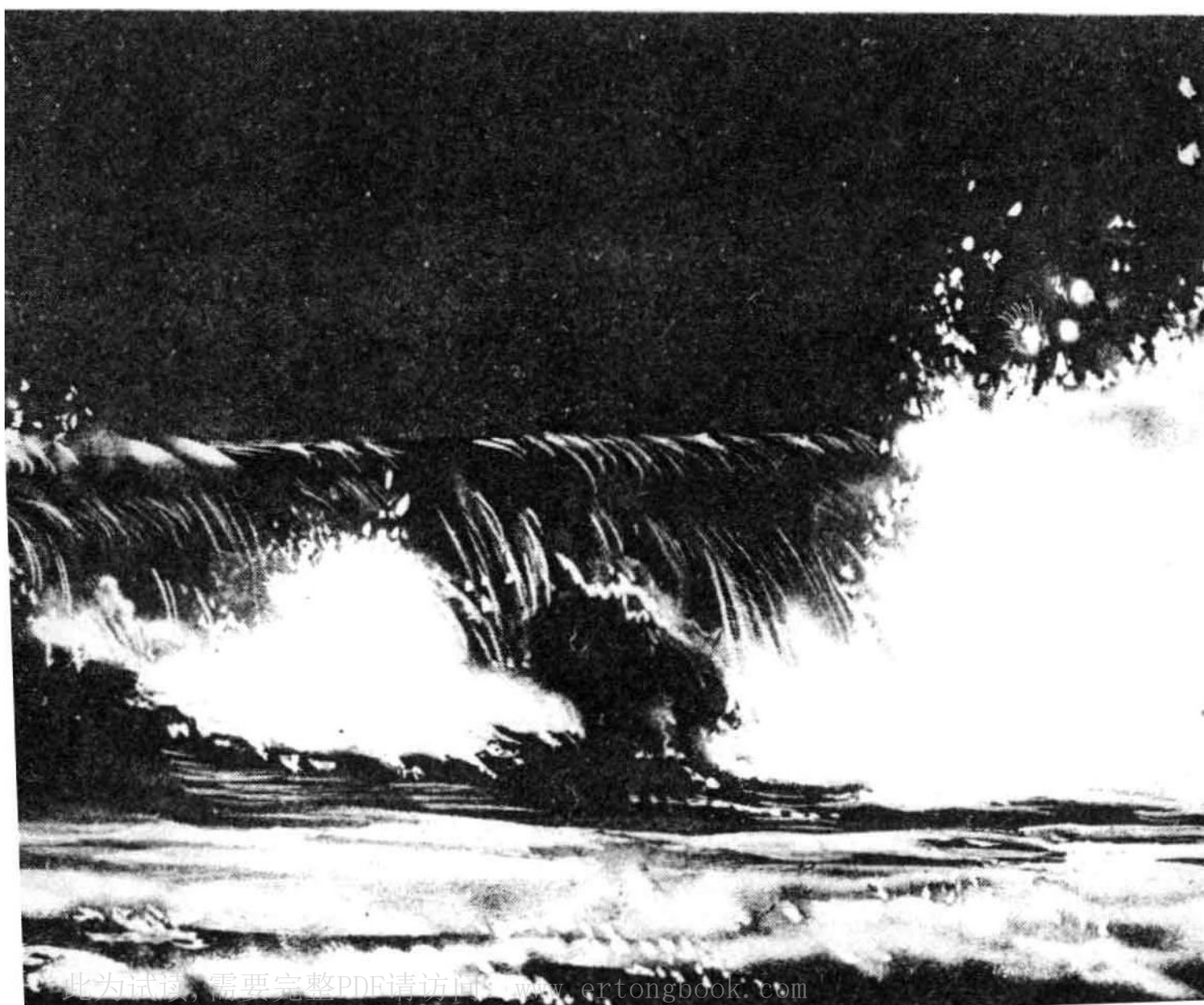
開通式

122

第四章

告別式

176



カバーイラスト・畑野賢一
本文イラスト・山本博通
カバー構成・EE大林真理子

第一章 結婚式

1

『鬼畜』という言葉が、随所に使われた。どの新聞も事件を報じる記事の見出しに、『鬼畜』という活字をまじえていた。テレビのワイドショーなる番組では、いずれも司会者やレポーターが『鬼畜』を連発した。

父親が実の娘に総額一億円の保険を掛けて、知り合いの男に殺させたという事件である。

父親というのは池内昭次郎、五十五歳となっている。殺された娘は弓子で、二十五歳だった。

池内昭次郎の妻は病死しているが、娘ばかり三人の子どもはこの八月まで、そろって健在であつたらしい。もつとも長女と次女はすでに結婚して、京都府下と静岡県に住んでいた。

三女の弓子は玩具会社に勤めていて、女子寮住まいだったという。池内昭次郎は、いまにも崩れ落ちそうな安アパートの六畳間で、独身生活を送っていた。

住んでいるところは別々だが、池内昭次郎と三女の弓子だけが、東京都民だったのである。

池内昭次郎は、無職であつた。働けない身体ではないのに、リ्यूマチに罹っていることになっていた。無収入だが、生活保護を受けている。生活保護法による生活扶助であつた。

池内昭次郎は、もともと働くことを嫌う男だったそうである。三十を過ぎてから、定職についたことが一度もない。妻が生きていたころは、池内昭次郎も彼女に養ってもらっていたのだという。

生来の怠け者であつた。パチンコ屋へ行くか、アパ

ートの部屋でごろごろしているかである。食事はすべて外食、人との交際はいっさいしなかった。

取柄とりがらといえは、酒もタバコもやらないということぐらいたろう。女嫌いでもあった。ギャンブルは競馬だけ、あとはパチンコということになる。

百円の金もなくなったときは、三女の弓子の勤務先が女子寮へ押しかける。五千元か一万円の無心むしんをして、池内昭次郎は引き揚げて来る。

ひどい父親、悪いお父さんと弓子の同僚たちのあいだでは、評判になっていた。生命保険に加入することを強制されて、『もしかすると父に殺されるかもしれない』と弓子が言ったということも、何人かの同僚が知っていた。

池内昭次郎は珍しく、パチンコ屋で口をきいた本間ほんまという男と、親しくなっていた。住所不定、無職、逮捕歴十二回と自称する本間に、池内昭次郎は弓子を殺してくれと持ちかけた。

「娘が死ねば、一億円、一億円からの保険金が手にはい

る」

「だから、娘を殺してくれっていうわけかい」

「そうだ」

「だけど、実の娘なんだろう」

「うん」

「実の娘を、金欲しさに殺すのかい」

「仕方がないだろう」

「仕方がないで、すませることかね」

「自分が手を下して、殺すって気にはなれない。それで、あんたにこうやって、頼んでいるんじゃないか」

「それにしたって、あんたは鬼か畜生だよ。鬼畜ってやつさ」

「引き受けては、もらえないってことか」

「いや、分け前次第だな」

「半分だ」

「五千万円とは、悪くないぜ」

結局、本間菊治きくぢという男は、弓子殺しを承知したのであった。

一週間後に本間菊治は、弓子殺しを実行に移す。玩具会社の夜勤を終えて帰って来た弓子に、女子寮の付近の路上で本間は襲いかかったのだ。

本間菊治は鉄パイプで、弓子の頭を滅多打ちにした。翌朝、池内弓子は病院で、意識不明のまま絶命した。そのとき呼ばれていた池内昭次郎は、遺体にすがり声を上げて泣いたという。

捜査本部は、一億円の保険金に注目した。池内昭次郎は弓子にとって実に悪い父親であって、父に殺されるかもしれないと弓子が口にしたということも、捜査員は聞き込んだのであった。

しかし、池内昭次郎には、明白なアリバイが成立した。それに、まさか父親が保険金欲しさに、実の娘を殺すこととはあるまいという捜査員の先入観も働いて、池内昭次郎をシロと見たのである。

ところが五日ほどたって、本間菊治が別の警察に逮捕された。本間菊治は友人宅を訪れて、『近いうちに大金が手にはいるから、それまで貸してくれ』と、財布を持

ち逃げたのだった。

友人は、一一〇番に通報した。本間菊治は、間もなく逮捕された。本間は取調べに対して、池内弓子殺しを仄めかした。そのために池内弓子殺害事件の捜査本部へ、本間菊治を引き取って、改めて取り調べることになったのである。

本間菊治は、池内昭次郎に頼まれて、弓子を撲殺したと自供する。やはりそうだったのかと暗然たる気持ちで、捜査員は池内昭次郎の逮捕に向かった。

昨日、十月五日の午前中に池内昭次郎は、実の娘殺しを全面的に自供した。それで今日の新聞やテレビで、『鬼畜』という言葉が多く叫ばれたのであった。

子どもが実の親を殺す、親が実のわが子を殺す、といった世の中であることに、人間は慣れっこになりつつあった。だが、池内昭次郎の鬼畜ぶりを、衝撃的な事件として受けとめる人も少なくはない。

北御門水江も、そのうちのひとりだった。もっとも北御門水江の場合は、そうした世相を憂えたり、金の亡

者になりやすい現代人を恐れたり、事件を社会問題のひとつとして捉えたりしたわけではなかった。

もっと単純な意味で、北御門水江はショックを受けていた。まずは何よりも、実の父親に保険金目当てという動機で、殺された哀れな娘への同情であった。

そしてもうひとつ、池内弓子が北御門水江と同じ二十歳だったということも、激しいショックを受けた原因になっていた。池内弓子に比べたら、自分は何というしあわせな娘なのだろうかと、北御門水江はしみじみ思った。

そういう池内弓子とわが身の違いを自覚することが、精神的な衝撃をいっそう激震にさせるのであった。池内弓子の薄倖と悲劇に、心から同情しないではいられなくなる。

北御門水江は、ガラス戸とベランダ越しに、秋の夕景を眺めやった。中野区の鷺宮三丁目に、北御門家はあった。南の西武新宿線の鷺ノ宮駅と、北の新青梅街道との丁度中間あたりに位置している。

家は外見が平凡な二階建てだが、庭の広さと門構えだけは、邸宅といわれてもおかしくなかった。北御門水江は生まれたこの土地と、中学時代に新改築したこの家が好きだった。

特に二階の一隅にある自分の部屋が、北御門水江は気に入っていた。南向きのガラス戸に近寄ると、西の方角の景色も見える。ベランダへ出れば、夕景を心ゆくまで眺めることもできる。

だが、このお気に入りの部屋も近々、北御門水江の過去の世界となる。水江の今日までの人生の歴史の大筋が刻まれているわが家に、別れを告げなければならなくなるのであった。

嬉しくても、それだけがいやなことである。いまでも夕景をチラッと見たとたんに、水江は感傷的になっていた。この部屋と別れるのが辛いと、わがままな気持ちにもなるのだった。

来月には、ここを出ることになる。

あと一カ月余で、北御門水江は結婚するのであった。

その結婚の相手が、いま水江の背後にいる。紫乃原順一、三十三歳、大学病院の医局に勤務する医師である。紫乃原という姓も、北御門と同じくらいに珍しい。互いに珍しい姓だという思いから最初、水江は紫乃原順一のことを意識したのだった。

知り合ってからすぐに、両方の家族が二人の交際を公認した。半年後には、恋人同士であるという自覚を持った。

結婚を、約束した。紫乃原順一が父親の後継者になったから結婚する、という約束であった。

紫乃原順一は、養子である。養父母は、群馬県の高崎市に住んでいる。養父も医師であり、高崎市内科、外科、整形外科、泌尿器科、産婦人科の総合病院を経営していた。

いずれ紫乃原順一は養父の後継者として高崎へ帰り、紫乃原病院の院長にならなければならない。あるいは、しばらく副院長ということで、修行するといった話にもなっていたのだ。

どっちにしろ、高崎市へ帰るようになったときには、

結婚するということに決まっていたのであった。しかし、養父が引退するような気配はないし、紫乃原順一が副院長になるということも、なかなか実現しなかった。

紫乃原順一と知り合ってから、三年がすぎた。水江は、二十五歳になっていた。十二月には、二十六歳の誕生日を迎えてしまう。結婚が遅れることを、北御門水江の両親が気にするようになった。

それで急遽、この十一月に挙式することを決定したのである。大学病院の医局員は多忙なうえに、研究と勉強のために時間を割くことで、家庭で寛ぐという余裕がない。しかも、収入が少なかった。

だが、やむを得ない。十一月に結婚して二、三年は、マンション暮らしをすることにした。群馬県での生活ではなくて、東京に住んでいられるということだけを、水江は密かに喜んだのである。

ガラス戸に映っている紫乃原順一を、水江は悪戯っぽい気持ちで見やった。紫乃原順一は、ソファにすわっていた。足と腕を組み、目をつぶっている。瞑想にふ

けっているような顔だった。

水江は、振り返った。

「順一さん……」

水江は、笑って呼びかけた。

紫乃原順一が、驚いたように目を大きく見開いた。いわゆる美男子という顔立ちで、医師らしい知性のほかに甘さを具そなえている。しかし、いまの紫乃原順一の表情は、怒っているみたいに険げしかった。

「居眠りなさっていたの」

水江は、口を尖とがらせた。

子どもがふてくされたときのように、上下の唇を重ねて突き出すのが、水江の癖くせなのであった。

「いや……」

紫乃原は、首を振った。

「でも、眠くて目をつぶっていらしたんでしょから……」

十年も愛用しているロッキング・チェアに、水江は腰をおろした。

「睡眠不足が続いて、少しばかり疲れているんだ」

紫乃原は両眼を、瞼まぶたのうえから指圧した。

「ごめんなさいね、そんなときに無理に呼びつけたりして……」

水江の全身が知っているロッキング・チェアの小さな揺れが、いつものように心地よかった。

「無理になんていうことはない。今日は珍しく、時間があいていたんだ」

紫乃原は、ニコリともしなかった。

「そういうときにこそ、順一さんを休ませなければいけないのにね」

紫乃原が不機嫌そうでいることが、水江は心配になっていた。

「とんでもない。きみのお父上に呼ばれたら、どんなときでも飛んで来るのが当たり前だろう」

足の貧乏揺すりを、紫乃原は止めなかった。

いつもの紫乃原と、どこか違っている。落着きがなくて、目つきが妙に鋭い。何となく、人相が悪くなってい

た。疲れているうえに、大学病院で不愉快な出来事があったのかもしれない。

「父は会社の診療所へ、順一さんに来てもらえるように工作しているらしいの。お話ってきつと、そのことだと思おうわ」

「そう」

「順一さんが、大学病院以外の診療施設の嘱託医になるっていうのは、一向に構わないことなんでしょ」

「もちろん、許される。医局員の給料は安くて、大学病院に勤務するだけでは生活が成り立たない。それで医局員はみんな週に二日とか三日とか、ほかの診療施設へ出向くことで収入を得ている」

「順一さんはこれまで、大学病院だけで通して来たのね」

「研究に費す時間のほうが、大切だっと思ったことかなんだ」

「それに順一さんのご実家が、経済的に豊かだったこともあるんでしょ。高崎のご実家からの経済援助があるの

で、順一さんはほかに収入の道を求めなくてもすんで来たんでしょね」

「いや、かなり厳しい耐乏生活を、続けているんだよ」

「ですけど、それは順一さんが独身のうちだから許されることだっていうのが、わたくしの父の考え方なの」

「お父上としては、そう思われるのが当然だろうな」

「つまり結婚してから、ご実家からの経済援助に頼って、生活を支えていくというのはよくない。自分の娘を妻にしたからには、順一さんの収入だけで結婚生活を維持していった欲しいというのが、うちの父の願望なんでしょうね」

「実に、よくわかる父親の心理だ」

「だから、父は会社の診療所の嘱託医に、順一さんを招聘しようとして躍起になっているんだわ。父の会社の診療所の嘱託医はかなり高給なんだって、父ったら変なことを自慢するのよ」

「まったく、ありがたいことだよ」

「週に三日で、二日が午後から、一日が午前中だけって、父は言っていたかしら。そんなことが順一さんに可能かって、わたくしには気になっていたんだけど……」

「ほかの医局員たちと、スケジュールを調整すれば可能だ」

「じゃあ父の頼みを、受け入れるってことになるのね」

「ぼくのほうから、是非^{ぜひ}について、お願いしなくちゃあ……」

「父は収入の道だけを考えて、順一さんを招こうとしているんじゃないの。父は純粋に、肝臓を専門分野とする若き内科医の順一さんが、社員の健康を守ってくれることを期待しているみたいだわ」

水江はガラス戸の外の夕景が、無数の明かりに彩^{いろど}られた夜景に変わっているのを見た。

「嬉しいね」

紫乃原順一は、ようやく白い歯をのぞかせた。

父の北御門英男^{ひでお}は、東西運輸の総務担当の取締役である。東西運輸は、全国に運輸網を広げる運送会社として、古い歴史と伝統を持つ。

その東西運輸が、ロケット印の宅急便で全国に再認識されて、業績も驚異的な伸びを示しつつある。今年の四月以降、東西運輸は日本の運送業界のビッグ3の第二位に、ランクされている。

新橋^{しんばし}にある東西運輸の本社ビル内に、広さも設備も満点の診療所があった。本社と関東地方の支社、営業所の従業員の健康を、その診療所が管理していた。

医師や看護婦の数も、そろっている。だが、医師たちの平均年齢が、いつの間にか高くなっていた。それに、対象とする患者が同じような人々に限定されることから、医師の診察と治療がマンネリ化する。

活性剤が、必要になっていた。週に三日ほど出勤の嘱

託医でいいから、外来患者を多く経験して新しい技術にも親しんでいる大学病院の若い医師を、迎えたいという要望が出ている。そこで北御門英男は総務担当の重役として、紫乃原順一を招くことを思い立ったのであった。

紫乃原順一ならば、厚生課から出されている条件に、びったりの医師である。同時に紫乃原順一には、高給が支払われることになる。一石二鳥だった。

「お父上が、そこまで面倒を見てくださる。まったく、感謝感激だ」

肩を落として、紫乃原順一は吐息した。

「そりゃあもう父は、自分のことみたいに一生懸命なですよ」

水江は、口を尖らせた。

「それだけお父上は、水江さんが可愛いつてことなんだろう」

紫乃原は、また目を閉じていた。

「目に入れても、痛くないっていうのかしら」

水江は、満足したときの笑いを浮かべた。

水江には、兄と姉がひとりずついる。水江は、三人兄妹の末っ子だった。そのせいなのかどうかはわからないが、父の英男はむかしから水江を特に可愛がった。

その点、母の幾代は違っていた。幾代はいかにも慈母^はという感じだが、子どもを溺愛するタイプではなかった。一定の距離を置いて、三人の子どもを長年、見て来たという幾代であった。

冷静とか、冷淡とかいうのではない。おっとりして、どこか暢気^{のんき}なところがある。相談すれば真剣に乗ってくれるが、黙っていると何も気がつかない。幾代には、そういうのんびりした人間の温^{あたた}かみ、人情味があるのだった。

そんな母親に、水江は容貌がそっくりであった。スタイルのほうは当然、幾代のように太めではなかった。身長も、幾代より高い。だが、水江の顔は、若いころの幾代そのままだという。

色が白くて、やや腺病質^{せんびょうしつ}の感じに潤み^{うるみ}がちな目が大きい。漫画の主人公の美少女みたいに、睫毛^{まつげ}が長かつ

た。鼻の先が、ツンと上向いている。唇は輪郭を描いたように、くつきりと形作られていた。

真っ黒な髪の毛を、セミロングより長めにしている髪型が、水江にはよく似合っている。お美しいと感嘆されるようなことはないが、お品がよろしいとはよく褒められる水江であった。

父親に可愛がられていて、母親に生き写しだということに、水江は幸福感を覚えていた。素晴らしい両親を誇りにしているし、自分は恵まれているとしみじみ思う。だからこそ同じ父親でありながらと水江は、英男と池内昭次郎という男とのあいだに、大きすぎる差を感じるのだった。

「昨日、実の娘を殺した池内昭次郎という父親が、逮捕されたでしょ」

水江は唐突に、その話を持ち出した。

紫乃原は、無言でうなずいた。

「あんな父親もいるのかって、わたくしびっくりしたわ。父親ってというのはみんな、うちの父と同じようなものだ

ろうって思っていたでしょ」

水江は上体を倒して、ロッキング・チェアを大きく揺すった。

「水江さんのお父上はあらゆる意味で、父親としての規準が最高だからね。世の父親はすべて、水江さんのお父上より下だっていうことになる」

紫乃原の開いた目が、虚ろに暗いというふうに見えた。

「そんなことはないでしょうけど……。順一さんのご両親だって、うらやましくなるほど素敵ですものね」

水江は、そろって髪が真っ白な紫乃原の両親を、思い浮かべていた。

紫乃原の養父母は、ともに七十歳を過ぎていた。四十代になってから子どもはできないと諦めて、生まれて間もない紫乃原順一を養子にしたためである。

「ぼくのところは、実の親ではないからだろうね」

紫乃原は、表情のない顔でいた。

「それ、どういう意味かしら」

「実の親子みたいに、狎なれるというだらしなさが無い。常に心の中には、互いにきちんとしなければならぬという思いが、置かれてるんだよ」

「だから……？」

「だから傍目はためには、立派な親、素敵な両親にも見えるんだ」

「親としてのポーズが、いつもあるってことなのね」

「そうだ」

「でも、お婿さんむこみたいに成人してから、義理の間柄になるのと違って、順一さんとご両親は実の親子の仲になりきっているんじゃないかしら」

「情愛というものは、実の親子と変わらないね」

「そうでしょう」

「ぼくがゼロ歳のときから、自分たちの子どもとして育てて来たんだから、実の親子の情愛が生まれる」

「生みの親より、育ての親ですものね」

「それで高校生のころまでは、ぼくも養父母だなんて意識を、持ちたくても持てなかったよ。自然に実の両親だ

って、思ってしまったってんだな」

「実の親子ではないって教えられなければ、順一さんだって一生、気づかなかったでしょうね」

「うん、気がつかなかっただろうね。戸籍上だってぼくは初めから、紫乃原大造たいそうと鈴香すずかの長男になっているしね」

「おばあさまが順一さんに、養子なんだっておっしゃったんでしょ」

「もう亡なくなったけど、とっくにね。母のおふくろさんだ」

「でも、そのお話を伺うかがったときから、わたくし不思議で仕方がなかったの。思慮分別しりよくんべつのあるお年寄りが、どうしてわざわざ順一さんにそんなことを、聞かせたんだろうかって……」

「隠したり、秘密にしたりすべきことではないっていうのが、表向きの理由だったけどね。だけど、やっぱり実の孫じゃないってことが、おばあさんをそういう気持ちにさせたんじゃないのかな」